

I-2 発問・助言

先生、その一言で「ハッ」と気付いた！

☆ 学習指導過程に沿って、精選し、計画的、意図的に発問する。

○ 導入時の発問

- ・ 学級全員が応答できるような発問を用意し、学習内容に対して興味・関心や課題意識をもたせて、学習意欲を高めさせる。

「〇〇について経験したり、考えたりしたことはありますか。」

「〇〇について不思議だな、どうしてだろうと思うことはありませんか。」

○ 展開時の発問

- ・ 考えや思いを深めたり広げたりする発問を用意し、学習を発展させる。

「もしこれがなければ、〇〇はどうなりますか。」

「〇〇と□□を関係付けると、どんなことが新しく考えられますか。」

→ 場面や対象を限定することで、考えや思いが深まります。

○ 終末時の発問

- ・ 学習の結果を整理したり評価したりする発問を用意し、次の学習の方向や生活への適応を明らかにする。

「〇〇について、どんなことが分かりましたか。」

「今日分かった〇〇は、みなさんの生活の中のどんな場面で使えますか。」

☆ 学習を深めるよい発問の在り方

1 簡潔、明瞭であること

- ・ 全ての子どもが考える材料をもっていて、何を考えればよいかが全員に分かる。
- ・ 学習目標に結びついている。

2 広がり、深まり、方向付けがあること

- ・ 想像、対比、批判を促したり、新しい考えを引き出したりする。
- ・ 意図的に相互の意見を対立させて、多様な考え方を引き出す。
「〇〇グループの考えは、その他の全ての場合にもあてはまるでしょうか。」
- ・ 子どもに発問させ、それを学級全体で解決していく。

3 具体的かつ的確であること

- ・ どう考えればよいのかが全員に分かる。
「〇〇ですね。さらに、『しかし』と考えてみたらどうなるでしょうか。」
- ・ 絵や写真、図表などを提示しながら発問する。
- ・ 個を生かす。
「〇〇について、以前熱心に調べたことのある□□さんはどう考えますか。」



※ 発問に見られるよくない例

- ・ 子どもに考えるゆとりを与えないで、次々と問い詰めていく発問
- ・ 一問一答式の発問
- ・ 観点がぼやけている発問 「駅までどのくらいかかりますか。」

☆ タイミングよく、子どもの思考を方向付けるように助言する。

- 態度・方向・目的・方法・技術などについて指導する。

「○○に目をつけて、同じ仲間に分けてみたらどうなるかな。」

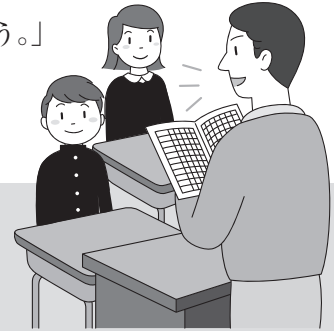
「○○さんの考え方のよいところはどこだろう。」「比べて考えることが大切だよ。」

「今まで勉強したことが使えないかな。前の時間のノートを見てみよう。」

- 学習上のつまずきを明らかにし、適正な判断に基づいて学習の改善を促す。

「あなたのやり方で、○○のところをやってみると、どうなるかな。そこがうまくいっている□□の人の意見を聞いて、別のやり方を試してみよう。」

「○○のことから考えているね。今度は□□のことからも考えてみよう。」



☆ 学習を深めるよい助言の在り方

1 意識して、暗示・賞賛・激励を

- ・ 子どもの思考に寄り添い、共感的な言葉を使う。

「○○がすばらしい。」「○○が前回より大きく伸びたね。」

→ 何が、どうよいのか、具体的にほめることが大切です。

「○○さんならできるはずだ。」「もっとよくするにはどうすればいいかな。」

2 子どものつばやきを全体に広げて

「今、○○さんがいいことを言ったね。みんなにもう一度言ってくれますか。」

3 学習の「仕方」に関することや「内容」に関することやを区別して

- ・ 学習態度や認識について助言するのか、学習内容そのものについて助言するのかを区別して助言する。

4 正しい・間違いだけに焦点を当てないで「誤答から学ぶ」雰囲気づくりを

「惜しかったね。でも、大きなヒントになるね。みんなのために、どうしてそう考えたか教えてくれる。」

5 「ゆさぶる」ことで、知的好奇心の刺激を

- ・ 子どもが確信している「正解」に対して、異論を唱えてみる。

「えっ、本当にそうなの。」「○○の場合にも当てはまるのかな。」

- ・ あえて事実と反することを子どもに投げかけ、それが間違っていることに気付かせたり、反論させたりする。

「先生は○○と考えるけど、誰か根拠をあげて反論できるかな。」

※ 助言に見られるよくない例

- ・ 具体性のない助言 「よく考えると分かるよ。」

「間」は命！

発問や助言の後、「間」をとって考える時間を確保していますか。「間」は、子どもにより緊張感と考える必然性をもたせます。次から次に問いかけたり助言したりすると、子どもはじっくりと考えられなくなります。

わん！ポイント！

